

力丸 茂穂

(りきまる しげほ)

昭和10年生まれ。昭和26年より金沢在住。
昭和38年～50年白山室堂診療所所長を務める
日本山岳会会員。白山会主宰。

にわかインタビュアーは要領悪く、再度時間をあけていただくことになってしまった。お約束時間よりやや早くお宅に到着。機手で待機していたら、ガレージのあく音。恐縮しつつのご挨拶のおり、目に飛び込んできたのは、ガレージの梁に並べられたかんじきの数々だった。それも、矯めを加えての乾燥中のものまで、材質も変えての、こだわりの品がぞろり…。以前も通りがかりに、感嘆して眺めていた元早稲田大の山岳部員がいたという。

初めての山は、昭和23年。地元熊本・金峯山だったそうだ。昭和27年、泉丘高校に転校。昭和31年5月、金大医学部教養課程時代の白山が北陸の山始めとなる。すでに野鳥の会会員だった力丸さんは、木村久吉先生達と、野鳥の鳴き声収録のために登った。

なお日本野鳥の会初代会長中西悟堂氏は石川県出身であり、昭和30年には白山で綿密な鳥勢調査を行っていた。その翌年には、白山が国立公園となり、石川野鳥の会も発足し、国立公園昇格をめざしての活発な調査が行なわれていた頃にあたる。

次には剣岳。続いて高三郎山が出てくる。「出てくる」とは、克明な山行記録のノートを手にして、話しておいでするからなのだが、通しナンバーで550回、うち白山は3分の1の168回になっている。

その白山に次ぐ回数となる高三郎山は、まず、「見栄えのいい山」として心惹かれたようだ。金沢から山を見る人なら、まず大きな医王山、次に、台形の大門、そしてアルペンの山容の三つ峰に目が行く。それが高三郎山だ。

まず10月に偵察がてら、石楠花尾根の炭焼き小屋まで。当時、それ以上には炭の材料になる木がないためか、そこからは杉道もない藪になっていた。翌年4月には、残雪の頂上を踏んでいる。

数回目で、高三郎。それも残雪期の単独行…当時の金沢の岳人はそんなものだったのだろうか？

もちろん、ガイドブックもなければ、山岳会も少ない時代だった。活躍していたのが、駒草会。見せてもらったその会報が情報源だったという。道のない藪山には残雪期に登るが常識だったし、当時まだ山友達がおらず、また、若く



て、体力に自信もあつての単独行であつたようだ。

ただ、それは身内にも心配をかけることになった。入山中に悪天候の一晚があつた。心配した兄上が、当時県内ナンバー1登山家とされていた長崎幸雄氏の所へ

「弟が一人で、高三郎という山に登りに行っているが大丈夫だろうか」

と相談に行かれていたのである。下山後、力丸さんは

「ご迷惑をおかけしました」

と、彼の勤務先の図書館まで謝りに行ったという。それが、5歳年長の山の師「長崎幸雄」氏との出会いであつた。

当時、すでに彼は有名人だった。白山頂上の方位盤を担ぎあげたごとく、根性と体力に恵まれた岳人であつた。かつて岳人はしばしば文人でもあつたが、やむなく進学を諦めた長崎氏の場合も、図書館を職場とする境遇にも恵まれ、綿密な考証も加えた文才を発揮しており、ただの山屋ではなかつた。かねてからの憧れの人・長崎氏は、力丸青年の下山報告をニヤニヤと聞いていたそうだ。

「この人が有名な長崎さん」「一緒に山へ行けたら、教わることが一杯あるのに…」の彼の夢は、これをきっかけに実現していくことになる。

写真ではわからないが、長崎氏は堂々たる体躯の持ち主であつたそうだ。一緒に急坂をラッセルをすると、力丸さんの方は足が上がりず、前進できていない状態になった。彼の業績の数々がどれだけ非凡な体カプラス努力で成し遂げられているか…知る程に畏敬の念は深まった。

そんな長崎氏も病魔には勝てず39歳で夭折。力丸さんは主治医として看取り、奥さんから預

かった遺稿を18年後に出版した。倉谷通いをしていたのは、その遺稿集「犀川をとりまく山々」の補完調査のためだった。

白山との付き合いは、昭和32年からの白山室堂「兵隊」職でさらに深まっていく。まだ臨床をやっていなかった氏は、診療班に加わったのではなく、一兵隊（一般アルバイト）として、夏と秋、室堂で過ごし、食材確保（山菜採り）にも精を出した。国立公園に制定されるまでは、山小屋は山で採れたものを提供するのが常識であり、サービスでもあった。この時に、木下幸雄主任とのご縁も始まっている。

インターン時代には山とはやや疎遠にならざるをえなかったが、剣岳を仰ぎ見る地で研修に励んだ。

金沢大学に戻ってからの、昭和38年から50年頃までは、室堂診療所所長を兼務するようになる。その間は、白山での医療に関する情報は全て耳に入る一方、どんな場合にも二つ返事で山に上がってくれる医者として応えるべく、常にサブザックが用意してあつてのスタンバイ状態を維持し続けた。

山小屋に某大学医学部診療所がある…一般登山者の側にはたいそう心強いことだが、医療者には「赤ひげ」的行為であろう。ちなみに知人のロック氏は慈恵医大OBで、槍ヶ岳診療所へ毎夏3度通っている。金沢でも出くわさないというのに、先年槍平小屋で交差してしまった。

「僕がこのコースでしか槍へ行った事がないって事、知ってる？」

との禅問答(?)を残して、駆け上がって行ってしまった。あれだけ達者ならどこへだって行けるのに…。

さて、室堂診療所ではどのような活動をされていただろう。

まず、怪我、病気の場合。手当のために室堂診療所へ運ぶ。それで一刻も早く下へととなると、ヘリのない時代には、当然ながら担いで下ろしていた。歩荷さんもいたが、夜にはもう下りていないし、連絡をとる手段もないしで、しばしば、診療班員や兵隊が担いで下ろすことになったという。

連絡手段は、夏山であれば、電電公社（現NTT）の無線があり、永井旅館と結ぶ有線電話もあったという。ただし無線は、発電機が回ってからでないと使えず、有線は台風などで断線すると使えなくなった。それらはとりあえず連絡がとれるというだけであって、現場は常に迅速な状況判断と行動を強いられるものだった。

検死要請の際には、そのように夏山であればまず無線で連絡が入る。勤務をすませてからで

ないと出るわけにも行かず、暗くなってから室堂着とか、暗い最中に上がったりのあった。その頃には「仏さん」は室堂に収容されていた。法医学的には、現場で検証かもしれないが、山では、捜索隊もそこに続けるわけにもいかない。室堂で死因、死亡時刻を推定することになる。法医学教授に、凍死の所見を聞きに行ったこともあるという。ちなみに凍死は、めだった外傷がないのは当然として、皮膚が白い、死斑がない…で、決まるという。末梢が収縮し、血流が阻害されてしまうためだ。

昭和41年8月19日の遭難も凍死だった。場所はカンクラ雪渓源頭部。雨風の中、昔の平瀬道に迷い込んで道を失い、青年は一人用テントの外で果てていた。やはり室堂で検死した力丸さんは、ジュークジュークに濡れていた綿のジーパンが印象的だったという。

珍しい例では、美大の教授で、室堂のすぐ傍で、花の写真を撮っている最中に、脳出血で死亡したという例があった。夜中に担ぎおろし、別当出合で簡単な検死をし、某医師が硬直した遺体の足2本を乗用車の窓ガラスから突き出したまま、金沢まで搬送したという。

ヘリを力丸さんが初めて要請したのは、南竜の小屋建設の際の韓国人労働者の症例。日本脳炎と思われるギランバレー症候群（手足の麻痺）を呈しており、重症との判断で要請した。入院後、死亡した。

ちなみに、ヘリは生きている人間なら収容するが、死体は収容しないのが原則だという。

ヘリが使えるようになると、室堂職員で、騒いで、ヘリで下りた人もあるそうだ。

周知のごとく、自衛隊のヘリなら無料。但し出動は、県の消防防災課が判断して、自衛隊に要請するものであって、室堂から直接お願いしてそれで飛ぶものではないそうだ。

県のヘリ「いぬわし」が入ったのはもっと後のこと。ただしそれは南竜まで上がるパワーしかなく、それ以上の高度での出動はやはり自衛隊のバトルに頼むことになった。



昭和46年5月連休の滑落事故の際には、医者が同行してほしいとの要請があり、力丸さんもバートルに乗った。夜中に小松基地に赴き、3時まで待機、室堂へ向かったという。事故者は室堂アルバイトの学生、十二曲がり上で作業中に滑落。ゴム合羽を着ていたため止まらず、岩にもぶつかりバウンド。肋骨3本骨折の重傷ながら、ヘルメットをかぶっていたため、それ以上の大事にはいたらなかったという。

「それって、鈴木良紀さんのことですね」

「え？知ってますか？」

「はあ、ワングルの同期です」

実は、3週間前の同期会で、木下主任・力丸さんのインタビューをやったと話したら、彼はとても懐かしがって、そのうえに新事実を暴露したのだった。

30数年前のあの日、それまで慎重に赤旗竹竿立ての作業をしていた彼が、ひょいと見上げると、長靴でちんたら上がっていく人の姿が見えた。あんななめた恰好でも大丈夫なんだと気を抜いて、不用意な一步を踏み出した途端ツルツとってしまったのだという。その長靴の主が力丸さんだったということだった。

思わぬ濡れ衣(?)を着せられていた力丸さんの方は、あの時はヘリで駆け付けた側だったそう。大騒動の当事者になってしまった鈴木氏の方は、気恥ずかしさと、痛みと、混乱の中で情報が混線してしまったのだろう。検分した力丸さんによると、十二曲がりの上部から、夏道のトラバース道も越えての大滑落で、ヘルメット様様の命拾いだったのだという。

ミレニアム記念白山の時、私は彼とそこを登っていた。私は事故現場を定かに知らず、仲間も話題にせずで通過したのだが、彼の方はきっと思い出の渦中にいたに違いない。なお、白山観光協会の30周年記念誌、50周年記念誌に、遭難事故記録がまとめられているが、この滑落事故は載っていない。

しつこいが、「長靴でちんたら上がっていった人」とは、木下道雄さんのことらしいとなった。実際、力丸さんも、長靴、地下足袋で上がったことがよくあったそう。ただし、物のない時代に育ち、履き慣れたの山での使用であって、足の置き方、力の入れ具合、微妙な年季が入っている。うわべだけみて真似ればとんでもない目にあう…それが遠因の事故だったということになった。

「検死」は死亡後まもなくの場合であって、白骨死体などは医者が出る幕ではない。警察のお仕事ということになる。

力丸さん自身、死体発見者になったことがあるという。場所は丸石谷、百四丈の滝のちょっ

と下、岩に埋まって手だけが出ていたという。細く白い手には橙色のカビが生えていた。まず見つけた同行者が逃げていってしまい、任せたとばかりに遠方から覗き見る中、掘ってみると肩も出てきた。その岩の上流側に回ると流れの中に足も見えた。手だけなら持ち帰られないわけでもないが、一人分の死体が流れの中で岩にもぐりこんでいる状態。あきらめて、また今さら慌てたのと、目的の百四丈の滝までは行くことにした。帰りに遺体の場所にケルンを積み、鶴来署に寄って届けたという。死体は、前年行方不明となった大阪の歯ブラシ屋さんのものだったそうで、奥さんが丸石谷の出合まで、花を供えに来ていたそう。

それは沢へ直接滑落したものだったかどうか…ともかく沢は究極流されてくる場所になってしまい、遺体が見つかることが多いという。だから捜索も、沢を重点的にやることになるが、遭難者の物ではない物もあれこれ流されてきているという。

私も山で死体を見たことがある。高1の時のカベツケ原付近で。交差した二人組のザックから、ミイラ化した手足が突き出ていたのだ。あまりのことに、咄嗟に「ありゃマネキンだよ」と弟とひきつりを笑いとばしたのだが、山にマネキンが必要なわけがない。ソーツと顔を見合わせ、異様な後ろ姿を見送ったのだった。気温が低い高山では、腐るというよりミイラ化していくようだ。



白山での遭難事例は、白山観光協会の冊子にも載っているし、鶴来署勤務だった東さん自費出版の回顧録にも詳しい。

力丸さんの経験からの白山遭難をまとめていただこう。

まず、白山は、槍・穂高といった岩峰と違い、転落死などは極めて少ない。ほとんどが行方不明。山がだらんとしているために、ルートを見失い易い。また、だらんとしているとは、谷が深いということであり、滝がある。行方不明になる人は沢伝いに下り、滝場で進めなくなり、登り返す気力も体力もなしで、遭難となる。

力丸さん自身何度か捜索隊に加わったことがあるが、5m間隔でのローラー作戦をとっても、人は歩き易い所をと選ぶ結果、みんな一箇所に集まってしまったものだったという。遭難者もおそらく同じ思考パターンをとり、知らず知らず沢に吸い寄せられて行くものらしい。

また、ガスにまかれた場合、笹原、雪渓、雪渓の消えた砂礫地でルートがわからなくなる。中宮道のお花松原への雪渓のあたり、大汝の裾、千蛇ヶ池のむこうなどはわかりにくく、特に下りが迷い易い。山慣れない人は天候があやしければ出歩かないことだ。

また、最近の中高年は行動期間が拡大している。文化の日の白山、勤労感謝の日の頃の白山など、無謀極まりない。

実力・経験が伴っているならいい。みんなで夏山へ行ったから、次も一緒に…と誰がリーダーかもはっきりしなかったり、5年ぐらい山へ行っていたらもうベテラン扱いをしてみたり、不測の状況に対応する術をもたないまま、季節の変わった山へも入り込んでいく。

典型的なのが、平成元年10月の立山遭難。交通機関が発達しているために、簡単に3000mの稜線に出てしまう。それでいて基礎体力のない中高年達は荷物が持てず、最低限必要とされる装備ですら持って上がっていない。ツェルトでもあれば死者は出ずにすんだ。

「僕はその点、クラシックなんかかもしれんけれど、というか、不便な時代に育ってきてその癖が抜けんというか、どうしても荷物が多くなる。医薬品まで持っていくし。」

「一人で行くと、テントからカメラから、携帯電話から、グループで一つあればいいような物も全部自分で担ぐことになって、体力的には不利になる。ただし、昔はそうできる人が山に入っていた。山はそれが出来る人しか行けない世界だった。小屋をあてにして山に行くような人は、雪山なんかには行くべきではない」

「だけど、来月号の岳人のサブタイトルは『雪の山小屋に泊まろう』でしたね」

こちらら反省！である。綺麗なカラー写真のガイド本作りに手を貸して、おいでおいでをやっているのだから。資本主義経済において、登山熱を煽っている側…出版社、登山家、写真業界、スポーツ用品業界、ツアー会社、山小屋、さらには新聞社等があり、恩恵を受けている。

それらは、事故が起されれば批判側にも回っているが、「健康的」「綺麗（快適）」「軽装備（気軽）」の誤解を助長させてもいるのだ。危険の方を学ぶことなく行動を拡大してしまう人達は、それでも概ね事なきでずんでいるけれど、中には貧乏籤をひく人も出てきてしまう。最

後には「自己責任」という「葵の御紋」が通ってしまうけれども…。

要するに不幸な結果が出てからの「自己責任」ではなく、「自己責任」からスタートすべきが本来「登山というスポーツ」なのだ。最初の自己責任部分が欠落しての遭難・事故が増えていく現在、煽る側にも、自覚が必要であろう。

さて、医者としての話題から離れて、道具にこだわりをもつのが力丸さんのキャラクターであられるようだ。

かつては、地下足袋にビッケルでグリースードもやられたそうで、ベストマッチばかりでなく、ミスマッチもなるほどと楽しんでいるのが力丸さん流というイメージである。

熊撃ちが使っているスパイク長靴はもともと釣りの世界から入ってきたものらしく、営林署もそれを履いているらしい。登山靴より、日本の湿った樹林帯向きといえるが、笹の根、跨ぐような木の幹をひどく傷めることになる。人間が快適・安全であることと、自然が保全されることとは、また別問題であって、道具の世界にはまだまだ、決定打はでてこないようだ。

力丸さんは長靴愛用派で、雪山でも1000mまでは、長靴にかんじきというスタイルだという。長靴はテントの出入りに何とも便利で、しばしば同行者の小用時にも「貸して」となるそうだが、中に布の張ってない物だという。それなら、タオルで拭くだけで、乾いた状態を維持できる。また素材が生ゴムであれば冷たくないそうだ。それは高山で売っている鮎色の品で、ビブス底を貼ってもらった特注品だという。なるほど、「長靴」だけを真似てはいけない。山中ではそれに、スパッツか、毛糸編みの脚絆。ごぼって抜く際には、やはり雪が入り込んでしまうからだ。

かんじきには特別こだわられているようだが…。スノーシューは持っておらず、聞いたままだが、まず重く、下りは滑り易く、平原向きと思うとのこと。ショートスキーは林道を下るなら便利かもしれないが、自分の行く藪山にはやはり不向き。スノーラケットという皮編みのカナダのかんじきは土産品で持っているが、軽い雪の平原向き。何といてもかんじきが日本の山には向いており、こだわってみたいとのこと。

かんじきは、結局足を置く位置は定まってしまう。足先が長くなると、足を上げる際に先端が雪につかえてしまい持ち上げられない。後ろが長くなると、これまたひきずるだけ。最初は嬉々と長いものを作ってみたそうだが…一歩も歩

けない。あれこれ試してみて、歩けるための靴先からの長さは決まるものだと分かった。

ちなみに新潟には煤竹製の「すかり」という、前に手綱のような紐をつけた長いかんじきがあり、北越雪譜に絵が出ているし、地酒のラベルにもなっているという。それは村内の道つかけの道具ということだ。

低山も好き、植物にも詳しい力丸さんは、「かんじきにいい材料だ！」で、木を見てしまうことが多いそうだ。木の種類について、一覧表も作ってあるとのこと。「折れ易い」「曲げにくい」「水に沈む」など。

ちなみに、かんじき作りの師匠は、見上山荘の故湯原忠政さんである。私の知る限りでは、芦峯寺のわかんが一番湯原さんのに近いように思うが、芦峯寺のわかんには「反り」がないのだという。

凝り性と自称する力丸さんは、その芦峯寺のわかん作りの佐伯さんの店も何度も訪ね、自作のわかんも見せに行ったそうだ。佐伯さんの方が「反り」を恰好いいねえと惚れ込んでしまい、反りのあるのと二種類作るようになってしまったという。それでも、生業とするからには大量生産であって、湯原さんの物とは比べ物にならない。湯原さんののは芸術品の域に達していたという。

湯原さんが亡くなってからは奥さんに教えてもらうこともあったが、彼女は再婚して、氷ノ山の麓に去ってしまった。かの地にも雪は積もるそうで、反対に「わかんを作ってくれ」と頼まれてしまった。目が肥えているから気が張ってしまい、故湯原氏の物と、自作の物と、それは旦那様用ということにして送ったという。

わかんの爪はアカガシを使う。佐伯さんののはミズナラ製だが、それだと柔らかく摩滅が早くなる。わかんのわっぱを曲げるのはたいしたことではないが、爪をつけるのが実はたいへんな作業なのだそうだ。

大量生産の方は爪の溝を15mmに切っており、対するわっぱの径は22mmから16mm。それを15mmに合わせて削り込んでしまい、それでわっぱの耐久性は格段に落ちてしまうとのこと。

湯原さんの方はわっぱの強度のために、一つ一つの爪の方を、それこそ左右の取り替えも出来ない程厳密に削っていたという。ゆずってぐらつくようなら金はいらんと切り切った程だった。コンクリートに飛び降りても壊れない。左右4本の爪を、わっぱの厚みに合わせて削り込む…それが大変という意味なのだった。絶対ぐらつかないためには、わっぱも乾燥していなければならない、爪も乾燥していなければならない、木のタチを知り尽くしての仕事だった。また、爪の両側を締める針金も、湯原さんの美学とし



カケス

て、錆びるような普通の針金は厭と、真鍮の針金を使っていた。アカガシの爪の赤、クロモジの茶色の肌、黄色の針金は何ともいえず調和であり、反りも絶妙。爪でちゃんと立ち、カタツとならない。また、そうでありながら、左右の重さの違いは15g以内。「うち行って量ってみまっし」と言われて、そうしたら本当だった。それに相手の体重も見て作っていた。

私が現役の頃、わかんは冬期活動の必携道具だった。だから、医王山の新歓の帰りに、「今年の新人は何人くらいは残るだろう」と3回生が予約していったものだった。30年前の当時で、3000円。卒業時には12,000円もして、かなり痛い出費だった。でも、もう一つ買っておいでもよかったかもしれない。まさに一生物といえる価値ある品であったのだ。

ミズナラの爪は磨耗が早く、かつ、水分が多いために、乾燥しての曲がりも出てくるという。アカガシは今は入手出来なくなり、力丸さんはシロカシを使っているそうだ。強度的には同じで、まず鋸で粗く型をつけ、その後、鬼目やすり、さらに目の細かいやすりと、形を整えていく。直線でない美学が許さず、マンリキで締め付けての作業。だから「爪が減ったから替えて」と言われても、そう簡単に返事が出来ない。「大量生産」といった佐伯さんの所にしても一日に3個のペース。休日利用の自分だと1月以上もかかってしまうことがある。今は化繊の紐で締めて、バックルで留める仕様になっている。バックルは昔の紐よりはるかによい。一日歩いても外れることがない。

そのようにこだわったわかんには、焼印を押して出来上がりとする。湯原さんは「医王山」だったが、自分は「白山」。そうやって、こだわりを楽しんでいる。

大町の山岳博物館に行っても、湯原さんのわかんにかなうわかんはなかった。おそらく日本で一番強いわかん、つまりは世界一強いわかんということだと、力丸さんはほほえまれる。

今さらですが、「わかん」で通る言葉なんだろうかとお聞きすると、わかんとは、輪かんじきのこと。かんじきには輪になっていない

物もあり、棒を並べて編んで、簀子のような四角状で使用する物もあるという。また、泥田に入るためのかんじきもあった。

そのように日本の雪質にあった山道具のわかんであるけれど、近年はコストダウンのために粗悪品が出回り、それがさらに道具としての評価を下げる悪循環を始めているという。日本の伝統的登山道具の技術が残って欲しいと願う力丸さんである。

さて、先日の熊撃ちの話をし報告すると、私よりずっと倉谷に詳しい力丸さん。

「加賀藩の租税の所を見ると、倉谷・二又熊胆（クマノイ）どれだけと書いてありましたね。米が取れないから、熊胆が年貢の代用になっていましたね。」

さらには、なんで山に住み続けたのかと、問の抜けたような質問もしてきたと言うと、

「昔は、米が給金だったから、とりあえずは士農工商とおだてられて、農民は年貢を納めていた。その下に…」

それこそ、インドやネパールのカーストどころではない、階層差別が日本にもあったのだ。轆轤師（ろくろし・または木地師）、山窩（さんか・または養作り）、その下は「非人」となり、焼き場、履物作り、肉屋などが、人に非ずとされた。彼らは土地を持たず、手仕事で世渡りをする自由人であった。為政者は、それらの人を蔑むことで、土地に縛られる者を慰撫し、年貢を納めさせ続けたのだ。川の土手に住む山窩は、神代の代の言葉を使い、山窩同士でなければ結婚できず、また、非人は四つ足を食う者としても卑しまれたらしい。

かつて、身分が固定していた時代があり、人はその環境・生業を変えることが許されず、その土地を離れれば、非人となり、流れ者になるしかなかった。

私も「サンカ」は初耳ではないのだが、それは白土三平の漫画「カムイ」で知っていた言葉…恥ずかしながら、時代物は山本周五郎ぐらいで、思考の際に出てくる単語ではなかった。

それより、ついこの間聞いたネパール弦楽器サランギの奏者。彼らは最下層カーストに属し、生まれた時からサランギを弾くしかなく、村をまわり両手一杯の穀物の施しを受ける…先祖伝来そんな暮らしをたててきた。それが急激な観光化により民族楽器奏者としてもはやされるようになる。町で現金収入を得るようになった彼らと、これまで同席を拒んできた村人達が一緒にお茶を飲むようなシーンが見られるようになったらしい。異国の差別を「何と下等な国」と蔑み、そんな話を面白がって聞いている私は、終戦まで、そのような差別が日本にもあっ

たこと、稼業も土地もそこで守り抜く物であったこと、外れた者が土地を離れていく定めであったこと…わかっていないのであった。

なお、サランギ奏者にも、かれらだけの業界用語とも重なる言語があり、第三者の入り込めない情報交換に使っているらしい。

となると、人の社会にはさして人種の違いは存在せず、社会の成熟課程の、その段階が様々ということなのかもしれない。「何が物好きで、山に住み続けるの？」と、ノー天気な質問を発してしまった私。本当に勉強になった。



アカネズミ

力丸さんは、今、明治39年発刊の高頭 式（しよく）編「日本山嶽志」という本の改訂版中「笈ヶ岳」「大笠山」「白山」を担当され忙しい。インタビューという私の勝手なご縁で、ほやほや草稿を拝受してきた。まだ手直しがあるとのことで、次の機会に紹介させていただく。

もともと凝り性で、中途半端に出来ない性格と自称されるが、特に本になると、一行一行に責任がある。後世に残す真実として、調べて、調べて、膨大な時間を掛けておいでるようだ。

その点今時のメール、IT情報というものは便利であるけれど、「お手軽」「お気軽」「無責任」である。現代的山登りの姿勢に通じるものかもしれない。

「笈ヶ岳」「大笠山」は、近年五箇山の山との誤解もあるようだ。

ちなみに、分県登山ガイドの山選定の際、「登山道が石川県側がない」が理由で「大笠山」を加えることが出来なかった。

「笈ヶ岳」に至っては、深田久弥がその時までには登っていなかったが理由で「百名山」から外れ、「道がない」が理由で、全国網羅の「分県ガイド」からも外れたのだ。お陰で秘境の山を保っているけれど、本当に人間様の勝手である。

すると、この際、中高年ブームに乗じようと、「五箇山の山」と言い出す人も出てくる訳である。

力丸さんの語調は、にわかに「歴史を知らぬ不届き者めらが！」の語調に変わられた。根拠はそのほやほや草稿にある通り、修験者の時代から、四高旅行部、金商山岳部、また駒草会、長崎幸雄氏らの活躍に至る、長い歴史が石川県側にあるのだった。一部のみ紹介させていただくと

『山岳修験の時代、中宮は笥笠（けがさ）神社を中心に、加賀馬場における白山禪定の登山基地として大いに栄え、僧坊が軒を連ねていた。一方藩政時代の越中五箇山は加賀藩に所属していたが、陸の孤島として藩の流罪人を封じる地になっていくくらいアプローチが悪く、近年でも車社会を迎えるまでは遠隔の山村僻地で、訪れ難い土地であった。加えて笥ヶ岳の東面は、雪庇の崩落によって生じた断崖地形となり、登路が全く得られないので、往時の笥ヶ岳登山への入峰は西面から中宮雄谷經由で行なわれたと見るべきである。』

とある。この秋にもお仲間と、清水平から西尾根の修験ルートを確認に行かれたらしい。

力丸さんは数年前の四高記念祭に、四高旅行部残党の話し相手を頼まれ、参加したという。

かつて、岳人と文人が重なっていた時代、今の中高年登山ブームとは明らかな一線を画していた時代の、最後の登山家が力丸さんであると私も思った。

◇ ◇ ◇

おまけ、アンコールは「大汝のコマクサ」の話。これは、初対面の日の二次会のスナックでお聞きした。

コマクサは、現在、大汝の避難小屋の横と、登山道から外れた某所のニヶ所に増殖中である。某所では、その付近にも飛んで、登山者を喜ばせているらしい。

国立公園法の「一木一草採取まかりならぬ」が、持ち込みを禁止していないのが悪いとか、「登山道に砸く石でさえ、焼いてから搬入している。従来の植物層を攪乱する行為は困る」との批判もあった。

某所に植栽したのは力丸さんらであるが、大

汝に植えたのは福井の人だということだ。

コマクサが昔立山にあったという古文書があるという。だいたい高山植物というのは、氷河時代からの生き残りで、温暖化にともない高地に残された植物群。人が文字を持つ以前から、繁茂した植物もあれば、消えていった植物もある。植物分布が調べられるようになったのはごく近年のことであって、その時点で「あった」「なかった」「変えてはならぬ」というのは、狭い見の生物観であると言う。

昭和天皇の植物指南役里見教授も「移植したもの」と明示してあれば、学問上も支障なしとされていたとのこと。

だいたい、コマクサは高山植物の女王とされるように、他の植物が生えぬ砂礫地を好み、気高く咲くものであって、他の植物と混生するものではない。すなわち植物層を攪乱する…も、根拠のない批判である。

つまりは、歴史、植物学、他何ら思考のためのカードを持たない者が、今時点のことだけで騒ぎ立てている話と、力丸さんは受けとめている。

私の方は無難に「皆さん、白山が好きなんですわね」にしておこう。コマクサが嫌いな人はいないだろうし、「自分の好きな白山に、誰かが勝手に手をだした」ことの方に、きっとムツときているのだ。

これから殖えていくかどうかは、コマクサの勝手の話なのだから。

また、大汝に建つ避難小屋は、昭和18年10月に設置された、かつての気象庁のロケット雨量計観測所の小屋を、緊急避難用に維持しているもの。

その維持責任者の白山会は、「百引く一は白」ということで、白山に九十九回登れば入会資格のある会なのだという。他には、「砂防新道では一般登山者に抜かれてはいけない」の付記もあったそうだが、会員が高齢化した今は、すべてまあまあにしてあるという。

先年、力丸さんは、大汝の避難小屋を当てにしてとしか考えられない場所と時刻に、登山者とすれ違ったそうだ。こいつ…と思いながら

「今晚、大汝泊りけ？」

と声を掛けたら、

「はい、力丸さんに許可を貰ってきました」と答えがきたそうだ。

何といても、たくましいのは、60億を越えた「ヒト」であるようだ。



山男、有情、厚し

山を愛し、山の本を書こうとし
て、志半ばで病に倒れた金沢市内の
アマチュア登山家の遺稿を、2人の
友人が18年がかりでまとめ、故人の
命日に合わせて近く出版する。

志受け継ぎ遺稿出版へ

「犀川をとりまく山々」と題
して出版の準備をしているの
は、金沢市城南千目、医師カ
丸茂雄さん(左)と岡市西金新
町、インテリアデザイナー市川
博さん(右)。共通の友人である
岡市森山千目、長崎雄雄さん
が病気でなくなったのは四十
年。三十九歳になったばかりだ
った。「県内ナンバー1」とも
呼ばれた登山家で、八十もある
さんの登山経験にひかれ、学生
方位置を担いで白山に登ったこ
とも知られていた。ホームク
ラウンドは、犀川(標高一
四二〇)と犀川近隣の山。
大変な難読家、仕事の合間に
こつこつ資料を集め、「犀川そ
の自然と歴史」という本を出版
するつもりだったが、その中の
一章「犀川をとりまく山々」を
一筆「犀川をとりまく山々」を
書いたところ、病に倒れた。
カ丸さんは、長崎さんの山の
後継者だ。細心で大胆な長崎
さんの登山経験にひかれ、学生
時代から長崎さんの助言を立
図書としてよく通い、度々一様
に山へ行った。長崎さんが病に
倒れた時、カ丸さんが主治



院に入院し、カ丸さんが主治
医になった。

長崎さんの死後、カ丸さんが
遺族から預かった遺稿には、長
崎さんがこれら山々をめぐり
た個所にあちこち傍線や注
を付けてあった。カ丸さんは仕
事の合間を縫ってその一二を
調べ、山へも行き、山の
暮らしを学ぶ。金沢市内に住
む人たちが訪ねては昔の話を聴
き、仲間の一人だった。

本を完成させてワープロ
を打つ古川博さん(金沢市
西金沢新町の自宅)で



自分で運んだ方位盤の前に立つ、在りし
日の長崎雄雄さん(左)とカ丸茂雄さん
—34年10月、白山御前峰の頂上で



「おひさしく出版でき、ほっとしています」と話すカ丸茂雄さん

川金沢市城南千目の自宅

18年がかり資料集め

校正など二人三脚

「犀川をとりまく山々」

三月十二日の長崎さんの命日
に間に合わせようと、二人は
今、校正と最後の仕上げに追
われている。この本には、犀川
付近の山や川、谷の地形的な特
徴や名前の由来、山々の村の
古い話や伝説、クマ
狩りや近代登山の歴史のいきま
つなど、犀川とそれを取りまく
山々にまつる様々な話が収録
されている。市川さんはこのほ
か、長崎さんが山岳雑誌などに
発表した短編も集め、「犀川山
にさる」(山にさる)の計
五冊も完成させておいた。

故・古川 脩さん

(ふるかわ おさむ)

手元に「夏山懐古」という本がある。古川さんからどの機会に頂いたものかの記憶は定かではない。限定 100部のこの本と、湯原さんのわかんを持っていたら、一目置いてもらえるような(?) そんな類の品である。ちなみに、

『大門山遭難略記』遭難顛末報告 能 登志雄
『白山地獄谷の日御子峰探険録』 丸岡 栄一
『死線を越えて』加飛越国境調査手記

北村 清太郎・出村 健次
と、石川県山岳史に残る事件の記録が列挙されている。

古川さんはそのように、かつての山記録を大事にされ、世に残すことをリタイア後の生き甲斐とされた方だった。たった三度しかお会いしていない私が語れるような方ではないのだけれど、この機会に紹介しておきたい。

ワングルの35周年記念誌を作ろうとした時、実行委員会には全く先立つ物がなかった。どうしたら安価に制作出来るか? すぐ思い浮かんだのが、山関係なら喜んでという噂の古川さんだった。彼は四高旅行部の部報ベルクハイル全巻を自費復刻されていた。

19期OB 梶さんの橋渡しで、書齋にお邪魔する。そこには退職金をはたいて買ったというドラム式コピー機があった。焼き付けコピーで原板を作り、後は紙代だけになるという機種だった。どの大きさを印刷用紙とし、そこにどんな順に印刷原稿を貼り込めば、紙代と製本代のみのお出費に納まるかを伝授された。結局はあまりにページ数が増え、上下2巻にもなり、専門業者に発注することになってしまったのだが…。

あの時機の上には、昔の草草会の会報があった。かつての会報は孔版印刷でかすれ、紙も黄変していた。古川さんはそれをワープロで打ち直しておいでた。



ウサギゴウモリ

山行記録を活字書籍とし、会員に配布すると同時に、足跡として残したい…山岳会の会報はその発行部数からは極端な割高になり、かつ、出来てから欲しいという部外者が現われても、配布できるだけの余裕部数を持てなかった。

山行記録を大事にされた古川さんは、そのような資本主義経済ではペイしないような記録が世に出ること、読み継がれることを願い、リタイア後の時間を惜しみなく使って下さる方だった。

岳人はどのような老後を送るのだろう。山に散った人の中には、「老後」など考えられない遭難で締め括った方達も多い。いつか無理が効かなくなる。いつか無理が出来なくなる…思い出を肴にだけでも侘しいではないか! そんな漠然とした私の不安・疑問に、壮快な老後を示されていたのが彼だった。

あれから、わずかの間にIT化が進んだ。多くの人が、デジタルカメラも駆使しての山行記録の編集を楽しみ、瞬時に配信出来るようになった。今では、ミニソーラーを広げればリアルタイムで山記録を配信も出来る。

しかし、軽薄短小というのだろうか、便利になる程、薄っぺらさが見えてしまう気がする。メディアが不便であった頃の方が、人は文章を練り、また、そう練られたかつての記録を大事にしていた。今情報は溢れ過ぎ、却って「消去」「削除」でバンと消えて行くものになってしまった。玉石混淆…どれが後世に残るべき情報かもよく分からず、一方、金沢の岳人なら当然知ってしかるべき人や歴史も抜けてしまう。「当然」が、単に私の価値観であるとなれば、どうしようもないのであるけれど…。

なお、古川さんの業績、他輝かしい時代の書籍類は、彼の尽力により、県立図書館の「長崎文庫」に収められている。彼はそれらを「国会図書館」にも収め、安堵の息をついていた。ちなみに彼のアドバイスで、ベルクハイム35周年記念誌上・下も、国会図書館に入っているのがある…私が安堵の息をついている。

ご本人にもうインタビューは叶わないので、丸さんに、補足をお願いした。

戦前、金沢には、一中～四高の裕福家庭のエリートコースがあり、次なるエリートがめざすのが、金沢商業高校(以下金商)であったという。当時の四高旅行部、金商山岳部は、めざましい活動と同時に記録を出すことで「岳人=文人」の時代を築いていた。うがって言えば、日

本が貧しかった時代に、遊びに山へ行けるのは、限られた若きエリート達であった。よって山記録も、文才きらめくレベルになりうるのである。

長崎氏も古川氏も、そんな時代の金商卒だった。古川さんは、生涯どの山岳部に所属されることはなく、杉村ケースK、Kに勤務し、インテリアデザイナーだった。

山路の会（やまみちのかい）を結成したが、それは山の本を作るための会であったという。

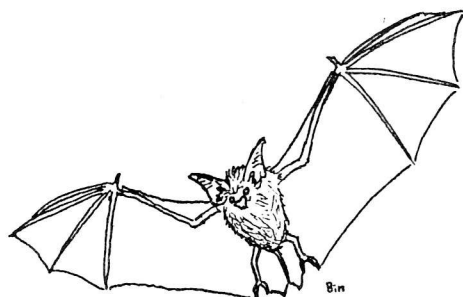
当時の岳人達の憧れであった、笈ヶ岳の地図を表紙バックとした原本を見せていただいた。寄稿者は駒草会、二峰山岳会、他個人。初版本には深田久弥も寄稿しているが、所属山岳会を問わずに、山記録を公開し、残していく会であった。その頃の岳人数は限られ、お互い顔も分かり、どこへ行くの、誰が行ったのと、すぐ情報交換も出来たという。彼らより少し世代のずれる力丸さんには「やまみち」は、バイブルといえる本だった。

リタイアし時間が出来てからの古川さんは、自分の現役時代の記録や、当時の会報からこれと思うものを集めて、ワープロで打ち、印刷機で刷り、配布していた。初めはホッチキス止めであったが、見栄え悪く、所蔵に耐えないということで、製本だけを外注するようになったという。四高旅行部のベルクハイルはページ数がありすぎ、それはワープロで打ち直すことなく、そのままコピーで、復刻とした。

売りに出すわけではないから、自腹を切った限定部数で作り、興味ある人に分けて楽しんでほしい。個人の山記録、還暦記念の冊子の依頼にも快く応じていた。

平成7年夏、彼の不調は力丸さんにより膀胱ガンと診断され、手術。以後ワープロを病室に持ち込んでの、抗癌剤治療を繰り返されるが、平成9年4月不帰の方となる。享年68歳。

終生、見事な岳人であられた。



書斎の岳人 古さんのこと

力丸 茂穂

（平成9年8月発刊「加賀藩士人別帳」
上下2巻の巻頭の文より）

この度上梓された加賀藩士人別帳 上、下2巻の内容の一部は、すでに平成2年に「加賀藩士檀家別名簿」という私家本として限定発刊されているが、これは加賀藩士の旦那寺を各宗派別に分類したもので、収録されている寺院数は151、檀家数は1,449名と、今回に比しかなり小規模なものであり、本番前の小手調べのような本であつたらう。

また同じ年、「城下町金沢町割覚書」も限定出版されているが、これには町割（旧聯区）ごとの地図とともに、町名の変遷・由来およびその町内に居住していた加賀藩士の名簿などを記載し、さらに、加賀藩の政治や城下町の風俗などについても、平易にかつ興味深く述べてあり、その3年前に出された「チョン髭歳時記」とともに、あまり肩の凝らない内容のものであつた。

今回出版の2巻は、このような一連の郷土民俗史関係の最終判ともいべきものであり、彼が宿病を得てのちに、入退院を繰り返しつつ、その闘病の病室にまでワープロを持ち込んだうえ、病苦に耐え、主治医の目を盗みながら夜遅くまでキーを叩いた、まさに生命を賭した執念のライフワークである。

巻末に付けられた索引は、利用者にとって非常に便利なのは勿論であるが、本文についても、人名あるいは旦那寺を発音順に並べ換え、しかも横読みにも編集してあり、1名につき1行に制限したうえ、各項目別に縦の野線で仕切つてあるので、人名以外の知りたい項目について、縦読みにも通覧することが出来るようになっている。

たとえば家祿については、末尾の文字の位置を揃えてあるので、数値というよりは横棒グラフを見るようなアナログ的感覚で、家祿の高低がある程度察せられる。

これは著者自身が、既刊の文献を利用する時に、かなり苦勞された経験に基づいているらしい。

このような編集方針は、長年に亘って著者自らがワープロを打ち、多数の私家本を製作・出版された過程において生まれた、アイディアで

あろう。ワープロは手書きと異なり、常に文字の桁、行、字数などが揃って印字されるので、原稿用紙を用いなくても、碁盤の目のように縦と横がきちんと並んでいる。

また、最新のワープロでは、最初の入力方法をうまく考えておけば、表計算ソフトを利用して、各項目ごとの並べ換えが容易に出来るが、果たして著者がかかる手段を用いられたのかどうか、幽明境を異にしてしまった今となっては、確かめる術がない。

このようなきちんとした整理方法は、著者が若い頃製図の技術を学んでいたからというより、むしろ著者自身の折り目正しい性格によるものである。

長い頭髮に不精髭を伸ばし放題にしていた、あの風貌だけしか知らない者には、そのような性格は到底窺い知ることはできない。

著者の古（フル）さんとは、山岳を通しての友人であり、休日に限って朝早く起きる特技と、山へ登ること以外に能のない私にとっては、またとない良き話相手であり心の友であった。

しかし振り返ってみると、彼とは、越中桂から飛騨加須良への峠越えの山旅に同行した記憶があるだけで、ついに一度も本格的な登山には同行することがなかった。

彼は若い頃からむしろ単独行を好み、山岳会に所属しての登山活動は最後までなかったのだが、「日本山の書の会」という山の本に狂いまくっている人々の集まりに所属していたので、山岳書に関する知識と関心は誰にもひけをとらず、かなり高額の山岳関係の稀覯本を古書店から取寄せては、私を羨ましがらせた。中でも彼のお気に入りのひとは、田淵行雄の著書であり、この点でも、彼と私とは馬が合ったのである。

登山者としての現役時代には、河内村の笈山付近にある修験道の遺跡「うまやのつぼ」へ谷川沿いに登りつめて、これを詳しく報告したり、県内屈指の秘境である瀬波谷を遡行して大笠山に達し、当時は国土地理院の5万の地図にも記載されていなかった「大笠池」を初めて報告されるなど、ユニークで価値ある登山活動をされた。

本来登山は反社会的な行為であり、そのような遊びにうつつをぬかす者は、昔から一風変わった人物が多く、その上、凝り性で書物好きというのが通り相場であるが、彼もまたそのような評価から免れることはできないだろう。

50代後半であっさり勤めをやめ、埋もれたま

まにしておくには惜しいが、採算性と時間の点からそれまで誰も顧みなかった郷土の古い登山記録を編集・復刻する仕事に熱中し始めた。

ワープロとコピー装置の出現はまさに彼のためにあったようなもので、二階の書斎に高性能のコピー機を持込んで、次から次へとワープロ打ちの私家本を作り始め、「山路の会」という実は彼一人しかいない会の名前で、山岳書の限定本を矢継ぎ早に発刊した。

中でも洛陽の紙価を高めたものは、長崎幸雄著、古川 脩企画・編集、北国出版社発行の「わが白山連峰」であり、また郷土の登山家に久しく待ち望まれていた四高旅行部の「ベルクハイル」全13巻の復刻であろう。

このような彼の道楽は徐々にエスカレートし、いろいろな人々が持込む会報や自費出版本などの製作を全くのボランティア、いや少なからぬ自費を投じてでも引き受けるようになった。もともとヘビースモーカーであったが、このような肩の凝る仕事の合間に吸う煙草の量が、彼の健康に少しずつ悪影響を与えた可能性は否定できない。

その後の闘病生活の合間にも、この道楽は絶えることがなく、時折自分の名前の「脩（おさむ）」をもじって「長夢（おさむ）」のペンネームを使用したりしていたが、ある時「長無（おさむ）」（たぶんもう「長くない」の意味であったろう）のペンネームで、主治医の私をドキリとさせる悪戯っぽい精神も最後まで衰えることがなかった。

今後彼のような仕事を、一体どなたが引き継いで下さるのであろうか。われわれ岳人仲間は今途方に暮れている。

（日本山岳会々員）



ハシブトガラス